

主 題：来る者を拒む主

聖書箇所：マタイの福音書 19章16－22節

マタイ11：28「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」、このみことばは私たちが伝道する時によく使うメッセージです。けれども、もし、私が皆さんに「イエスさまはすべて疲れた人、重荷を負ってイエスさまのもとにやって来た人を受け入れることをしなかった」と言ったら皆さんは驚かれますか？イエスは確かにそのように言われたのですが、私たちが聖書を見た時、イエスが本当にイエスのもとにやって来る人たちを例外なくすべて受け入れたのかと問うなら、その答えは「ノー」なのです。事実、イエスは人々が熱心に永遠のいのちを求めて自分のもとにやって来ているのに、その人たちを追い返しています。今日の福音主義の教会の中であってこのようなアプローチを取ることは、求道者たち、熱心に永遠のいのちを求めてやって来る人たち、救われたいと願って教会へとやって来る人たちに対して考えられない行為です。事実、多くの教会の多くのクリスチャンたちは、このように救いを求めてやって来る人たちのために、福音のメッセージに一生懸命きれいな飾りをつけてパッケージし、彼らがより受け入れ易いように、必要ならそのメッセージを曲げることもさへ躊躇せず、何とかして求道者を教会へとつなげたいと努力しています。けれども、そのような行動、そのようなメッセージをイエスはしておられません。イエスは求めてやって来る者たちを追い払ったのです。私たちはこのことを非常に注意深く考えなければなりません。なぜなら、今現在、キリスト教会の中にあっても、自分は救われている、クリスチャンであると考えていても、実は救われていない人たちが存在するからです。彼らは福音を聞いたときに、イエスと違うアプローチをとって、正しく福音を伝えることをされなかったゆえに、間違っ導かれ、自分たちは永遠のいのちを受け継ぐ者になったのだと誤解している人たちです。教会には、このように求めてやって来る人たちを受け入れたいと願っている多くの人がいた、彼らを追い払うこと、彼らを拒むことを一切しないゆえに、本来なら、教会にいるべきでない人たちが教会に籍を置いていることがあるのです。

多くの人たちが自分は救われていると言います。問題は、本当にその人たちが永遠のいのちを受け継いでいるのかどうかです。それを得ているのかどうかです、本当にその人たちが救われているのかどうかです。なぜなら、自分が救われていると考えていても、そう思い込んでいても、実際に、天の御国にたどり着いた時に、その門で「あなたは、ここに入るべきではありません。」と言って追い返されることほど悲劇なことはいないからです。そんな悲しいことはありません。イエスの生涯を私たちが振り返る時、イエスは決して、ただの一度も自分のもとにやって来る人たちが「自分は本当に救われているのかどうか？どうなのだろう？」と疑問を抱くような思いを持って帰らせることをしませんでした。イエスは常に人々にはっきりと彼らがどの位置に立っているのかを現わしていたのです。イエスは人々が神の御国に入っているのか、そうでないのかを明確に現わして来ました。このことを何よりもはっきりと現わしているのは、イエスが会われた若い金持ちの役人との対話です。その中で私たちは、イエスとこの青年がどのような会話をしたのかを見ることができます。そして、そこでイエスがどのようにこの青年に接したのか、熱心に救いを求めてイエスのもとにやって来たこの青年に対して、どのように接されたのかを見ることができます。そして、そこで私たちはイエスがどのように永遠のいのちを得ることが出来るのかを説明している、その姿を見ることができるのです。これは非常に重要な事柄です。それゆえに、イエスはこの会話を通して、弟子たちにだれが永遠のいのちを得ることが出来るのかを説明したのです。この機会を用いて…。今朝、私たちはイエスとこの青年との会話をみて行きます。そこでいったい何が起こったのか、どのような状況で、どんなことが聞かれ、どんな回答が与えられたのかを見ます。なぜなら、そこには非常に多くの大切な事柄、私たちが考えなければいけない事柄が記されているからです。

皆さんに一つお願いしたいことは、今日、皆さんといっしょにこの箇所を見て行くに当たって、皆さんにぜひ聖い想像力を働かせていただきたいのです。どうぞ、自分がまるでこの会話が行われていたその場所にいるかのように想像してみてください。イエスとこの青年が話をしているその姿を、すぐ横で見ている群衆の一人に身を置いてみてください。そして、この会話をみて行くその最後に、ぜひ、皆さんご自身がこの青年だと思ってイエスの質問に答えてみてください。それを願うのは、このことが永遠のいのちを得ているのかどうかということに、非常に大きな問題をもたらすからです。私たちにそのことを明確にしてくれるからです。マタイの福音書19章の16節から30節までを読みます。今日見るのは22節までです。30節まで読むというのは、16節から始まるセクションが30節までで一つのまとまりになっているからです。出来れば次回、みこころなら皆さんといっしょにこの続きを見て行き

たいと思うのですが、今日はこの会話を見て行きます。しかし、30節まで読むことで、皆さんにここでどんなことが起こっているのかを考えていただきたいと思います。

「:16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」:17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」:18 彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。」:19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」:20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」:21 イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」:22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。:23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。」:24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」:25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」:26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」:27 そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」:30 ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」

皆さんがよくご存じの箇所です。金持ちの青年とイエスとの会話です。16節から始まるこのセクションは、「どうすれば永遠のいのちを得ることができるのか」という質問に始まり、「このような者たちが永遠のいのちを受け継ぐ」ということばで終わります。これらは一つのまとまりになっています。そこでイエスは私たちに、どうすれば私たちが永遠のいのちを得ることができるのかを明確に教えてくれているのです。

## ☆イエスと青年の会話から — その問題と結果

### 1・青年の質問

最初に私たちが見たいのは、どのような質問がなされたのかということです。ここでは最高の質問が為されています。皆さんよくご存じのように、この話は、イエスのもとに一人の男性がやって来て、非常に重要な最高の質問をするところから始まるのです。けれども、この最高の質問、それ自体を見る前に、私たちはいくつかの事柄を知っておかなければいけません。ですから、そのことを見て行きましょう。この最高の質問が為されるに当たって、それはいったい、いつ、どこで為されたのでしょうか？そのことは文脈の中で明確に知ることが出来ます。

#### 1) いつ、どこでなされたのか？

実は、このことはイエスがエルサレムに向かって最後の旅をされているその最中に起こったことでした。最後の過越の祭り、イエスが十字架にかかるその過越の祭りに向けて、イエスが旅をしている最中のことでした。イエスはラザロをよみがえらせた後、しばらくの間、ガリラヤ地方で働きをされていました。そして、その後、ガリラヤからエルサレムへと下って行く巡礼者たちといっしょに、旅を始められるのです。イエスはここで、ガリラヤを出ていよいよヨルダン川を越えて、ヨルダン川の東側ペレアの地方と入って行きました。実は、そこでこのことが起こったのです。このペレアでイエスは何をされたでしょう？ペレアに入った後もイエスは働きを続けられました。イエスは多くの人々、群衆の前で様々な奇蹟を行ないました。特に、いやしの働きをされました。そのことが19:1-2辺りに記されています。他の福音書の並行箇所にもこのことは詳しく記されています。

(参考=並行箇所、マルコ10:17-22、ルカ18:18-23)

そして、この青年がやって来る直前に何が起こっていたのかというと、このようにいやしの働きをしていた中で、イエスは多くの教えもされていたのですが、その中の一つに実はパリサイ人との問答があったのです。パリサイ人たちはイエスのもとにやって来て、イエスを何とかして「ことば」で捕らえようと質問をしました。それは結婚と離婚についての質問です。そこでイエスはパリサイ人たちの質問に、すばらしいみことばの理解とその解釈をもって答えられ、彼らの口を封じました。まさにすばらしい教えがそこでなされたのです。そのような問答を終えた後、イエスはこのペレアの一つの町にある一軒の家に入られました。きっと休まれるために入ったのでしょうか。この家の周りにはまた群衆がたくさん集まっていました。イエスが休もうと思っただけに入っただけにはお客さんが絶えなかったのです。なぜなら、多くの親が自分たちの子どもをイエスに祝してもらおうと、イエスが休んでいるその家の門をたたき続け

たからです。多くの子どもたちがイエスのもとに連れて来られました。けれども、それを見た弟子たちは、きっとイエスを休めたいと思ったからでしょう、子どもたちが来ることを止めたのです。すると、イエスは「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのよ  
うな者たちの国なのです。」(マタイ19:14)と言われたのです。皆さん、想像されていますか？聖い想像力を働かせておられますか？今、皆さんはこの家の外にいます。今、皆さんはそこで、これから何が起こるのかを見ようとやって来ているのです。多くの子どもたちが出入りしていましたが、その出入りが止まってしばらくして、イエスはいよいよこの家から離れて巡礼の旅を続けようと言われたのです。皆さんもイエスについて行こうとしているのです。それが、いつ、どこでこの質問が為されたのかというその背景の部分です。

## 2) だれが質問したのか？

いったいだれがこの最高の質問をしたのでしょうか？そのことを見るにあたって、私たちはマルコのことばを借りましょう。マルコ10:17に「**イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、**」とあります。「**ひとりの人が**」、これは男の人です。ルカとマルコの福音書にも同じ記事が記されていますが、マルコは「男の人」と言いました。マタイとルカは、さらにそれに詳しい説明を加えています。ルカは「**またある役人が、**」(18:18)とこの男性は役人だったと言います。実際にこの人物がどのような役人だったのかはよく分からないのですが、ただ、ルカが使うこの役人ということばを調べてみると、彼はこのことばをユダヤ人の議会の一員、または、その地域の会堂の役人、そのような人物に対して使っていることを見ることができます。つまり、この若い役人、若い青年、金持ちの青年と言われる人物は、会堂の役人だったか、もしくは、ユダヤ人の中でも宗教的なリーダーだった可能性があるのです。少なくとも、彼はこの町においては非常に尊敬を受けた宗教的なリーダーだったのでしょうか。マタイはこの人物が青年だったと言いました。そのことが19:20に記されています。若かったのです。そして、三つの福音書すべてが言うことは、彼が非常に多くの財産を持っていたということです。それゆえに、私たちは彼のことを「若い、金持ちの役人」と呼ぶのです。彼は何歳ぐらいだったのか私たちにはよく分かりませんが、決して年老いた人物ではなかったのです。まだ、若かったのです。そして、彼は宗教的なリーダーとしてのポジション、その地位を少なくともこの地域で築き上げていました。そして、彼は多くの財産を持っていたのです。今現代風に彼のことを言うなら、彼は間違いなく「勝ち組」でした。

彼は若くして多くの財を持ち、様々な分野で力を持ち、影響力を持ち、人々の中で非常に有名で尊敬を受けていた、そのような人物だったのです。しかも、彼はまだ若かったのです。彼に欠けたものは何一つ見ることはありませんでした。彼はそのような人物だったのです。この人物があたかもすべてを持っているかのような人物が、イエスのもとにやって来て、質問をしたのです。

## 4) どのように質問したのか？

いったい、どのようにこの質問が為されたのでしょうか？そのことはルカの福音書にもマタイの福音書にも記されていませんが、マルコの福音書が私たちに教えてくれます。マルコ10:17に「**イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。**」とあります。皆さんの想像は続いていますか？イエスが家で休まれている、いよいよ旅立つ時間となってその家を出て来ました。そうすると何が起こるのでしょうか？私たちはその周りを囲んでいる群衆の一人だったのですが、そこから一人の人物、非常に有名な私たちが尊敬しているその若い人物が、イエスのもとに走ってやって来るのです。このことから、私たちはいくつかのことを知ることが出来ます。

### a) 走りよって

いったい、どのようにこの青年はイエスに質問をしたのでしょうか？初めに、私たちが言えることは、彼が非常に熱意をもってイエスのもとにやって来たということです。彼は熱意をもって走って来たのです。群衆をかき分けて、大慌てで、今イエスにこのことを聞かなければいけないと思ってやって来たのです。彼はこのようには思っていなかったはずですが、機会があったら、イエスがたまたま私の前を通過して私の前で止まってくれたら、声をかけてこの質問をしましよと。彼は今このときに何としてもイエスにこの質問をしなければいけないと思って、イエスが出て来るのを見計らって、走って、イエスの前に出て来たのです。熱心な求道者だと思いませんか？非常に深い熱意を持った人物でした。それだけではありません。何度も言うように、彼はこの地方では有名な人物で財産があり宗教的なリーダーであり、成功を収めた人物です。影響力を持っていた人です。その人がイエスの前に走って群衆をかき分けて出て来たのです。すごいと思いませんか？これがまだイエスの働きの初めの頃なら、すばらしい人がやって来たと言ってしまうようなことがあっても当然かもしれません。でも、これはイエスの働きの終わりのときだったのです。ユダヤ人のリーダーたちはみな、どのようにしてこのイエスを殺そうかと考えていたのです。その時に、彼は人々の前で大胆で熱心でした。彼は大胆だったのです。覚えていますか？ヨハネの福音書3章に記されていますが、ニコデモがイエスを訪ねてやって来ました。ニコデモはどのよ

うにイエスのもとに来ましたか？いつやって来ましたか？夜の闇に隠れてやって来たのです。ところが、この青年は白昼堂々、自分のことを知っていた人たちがたくさんいるその中で、私は人の目など関係ないといばかりに、大胆に、人目を憚らず、イエスの前に出て来たのです。すごい熱意、すごい大胆さです。

## b) 御前にひざまずいて

そして、それだけではありません、マルコはこう言いました。イエスの「御前にひざまずいて」と考えてみてください。彼は宗教的リーダーです。通常は、ここにいる群衆が皆ひざまずいて教えを聞こうとしていた人が、イエスのもとに走り寄って来ていきなりひざまずくのです。謙遜な態度です。熱心に熱意をもって大胆だっただけでなく、彼は正しい態度、謙遜の態度をもってイエスのもとにやって来たのです。教えを受ける者だから、私はあなたの前にひざまずかなければならないと、へりくだった態度をもって彼はやって来たのです。彼のもっていた社会的地位を考えるなら、これらのことすべては驚くべきことでした。彼はこの社会、地域にあって非常に有名な人物で、尊敬を受けていたのです。ところが、彼はへりくだりの態度を取って、人々からどのように思われるのかなどは考えることなく、イエスにしなければならぬと考えていた重要で最高のこの質問をしようとするのです。

## 5) 青年の質問とは？

彼はいったい何を聞いたのでしょうか？驚くべきことが記されています。マタイ 19 : 16 「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」、青年はこの質問で非常に驚くべきことを言ったのです。彼は群衆の目の前で「私は永遠のいのちを持っていません。」ということ認めたのです。この質問は、非常に深いどうしようもない渴望をもった心から出てきた正直な質問でした。この質問は、彼が持っていたどれほどの財産やどれほどの力であっても、また、どのような影響力であっても、それらが彼に永遠のいのちを与えることは一切なかったということを私たちに教えるのです。彼がどれほど熱心に宗教的な行ないをしていたとしても、それらにどれだけの努力を払っていたとしても、彼は自分の心に内にあった永遠のいのちに対する渴望を埋めることができなかつたのです。彼は渴いていたのです。彼は求めていたのです。そして、そのような深い渴望の心をもって、彼はイエスのところにやって来てこのような質問をするのです。「先生、先生。どうすれば私は永遠のいのちを得ることができるのでしょうか？」と。すばらしい質問だと思いませんか！正しい質問だと思いませんか！

ちなみに、この「永遠のいのち」とは、私たちがこの地上で長く生きることではありません。ここで言われているいのちとは「霊的ないのち」のことです。彼が求めている「いのち」とは、この地上ですべて生きていくということではなくて、神との関係に見出すことができる「霊的ないのち」なのです。確かに、彼は後の世で与えられる、永遠に神とともに過ごすことができるそのいのちのことを考えていたのだと思います。そのことは確かに約束されていましたが、でも、彼に欠けていたのは、そのいのちがあることによってもたらされる、神との交わりであり、神の愛にある喜びであり、満足であって、イエスに見ることができても自分自身に見ることができない、そのいのちだったのです。何よりも興味深いのは、この「永遠のいのち」というそのことばが、この文脈の中で、実は、「天の御国」や「神の国」、「救い」ということばに置き換えられていることを見ることができることです。つまり、この青年がイエスのもとに来て求めたことは、「イエスさま、どうすれば私は神の国に入ることができますか？イエスさま、どうすれば私は救いを得ることができますか？」というものです。それが彼の質問だったのです。不思議なことです。人間的に考えるなら、彼には何一つ欠けたものはないように見えます。若くして多くの財産を持っていて、あらゆるところに影響力を持ち、彼は宗教的にも偉大な人物で人々から尊敬を受けていたのです。何に欠けるところがあるのでしょうか？でも、この人物はよく分かっていたのです。「私には欠けたところがある。永遠のいのちがない！」と。

でも、周りで見ている人たちはそのように思わなかつたことでしょうか。もし、だれかが永遠のいのちを持っているとするなら、きっとあの人だろう、あの人なら永遠のいのちを持っているに違いないと思っていたのです。だから、実は、新改訳聖書には訳されていないのですが、19 : 16の初めには原文には「見よ」ということばが使われているのです。驚きを現わしているのです。「見なさい！こんな人がやって来ました」と。ですから、皆さんがこのシーンを想像するとき、それはイエスが家から出て来られ、周りの群衆の中から一人の人物がイエスのもとに走って出て来たとき、周りの人たちは皆、「エッ！」と驚いた、そのようなシーンです。彼がイエスの前にひざまずいて「先生。どうすれば永遠のいのちを得ることができるのでしょうか？」と聞いたとき、そこには驚きがあつたのです。

彼は「どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」とそのように聞きました。マタイの福音書とマルコの福音書を見ると、そこでは文法的な文章の使われ方のゆえに、良いことをすることと彼が永遠のいのちを得ることに對して、非常に密接な関係があることを表わす、そのような表現を彼が使っていることを見ます。つまり、彼は何かを行なうことによって永遠のいのちを得ることができると思ったのです。確かに、ここには間違いがあります。私たちはよく知っています。永遠のいのちは律法を守ることによ

て得るのではないのです。私たちは行ないよって救われるのではないからです。けれども、この青年をもう少しやさしい目で見ましょう。彼はそのようなシステムの中で育ったのです。彼が知っていた宗教は、何かをすることによって得るものだったのです。確かに、間違いはそこにありました。そのような考えに縛られていた彼は間違っていたのですが、でも、この質問をした彼は、間違った意図でその質問をした訳ではありません。彼は正直に「私は持っていないから、どうすれば救われるのですか？」と聞いたのです。正直な大切な質問です。心からの渴望のもとに為された質問です。

いったい、だれにこの質問をしたのでしょうか？イエスに対して為されました。この青年はイエスのことを「先生」と呼んでいます。律法の教師、もしかすると、神の預言者、そのように彼は考えていたのかもしれませんが。ただ、マルコとルカの福音書を見る時に、私たちはもっとすごいことを見るのです。実は、ここで彼はイエスのことをただの「先生」と呼んだのではなく、「良い先生」と呼んだのです。日本語の聖書は「**尊い先生**」（マルコ10：17、ルカ18：18）と訳しています。これは「良い先生」ということです。これがどうしてすごいことなのでしょう？ユダヤ教の文献を調べると、教師が「良い先生」と呼ばれることは一切ありません。彼は非常にまれな表現をしたのです。今まで一度も聞いたことがないような表現を使って、イエスのことを「**先生**」と呼んだのです。彼は単にイエスが律法の教師であると思ったのではなく、この方は「**良い先生**」だと思ったのです。イエスのうちに、人には見るできないもの、他の教師たちには見るできない潜在的な良さを彼は見たのでしょうか。そこに神との深い関係というものを彼は見たのでしょうか。そうでなければ、あのような奇蹟を行なうことも出来ないし、こんなすばらしい教えを説くことなどできないと、彼はそのように考えたのです。ニコデモも言いました。ヨハネ3：2で「**先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしは、だれも行なうことができません。**」と。この青年も同じように思ったのです。「**良い先生**」と言ったことはこの青年がいかにイエスに深い尊敬をもっていたのかということを表わしています。ひざまづくこととともに…。この青年はイエスの前に正しい態度をもって出て来たように見えるのです。イエスのことを心から尊敬して、どうしてもその教えを乞いたいと願ってひざまずいて懇願したのです。「どうすれば、私は救われますか？」と。

彼は正しい方のところに来ました。この質問に答えるのにこれ程相応しい方はいないではありませんか。なぜなら、この方こそ「わたしはいのちです。」と言われたお方だからです。「**その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。**」（ヨハネ17：3）とイエスは言われました。彼は正しいところにやって来たのです。そして、すばらしい質問がそこでなされました。最高の質問でした。

## 2. イエス・キリストの答え

これに対して、イエスは実に冷たい応答をされます。もし、私たちがイエスの代わりにそこに立っていたなら、私たちは間違いなくイエスと違う応答をしたことでしょう。「ようこそいらっしゃいました」と両手を広げて彼のことを迎え入れたでしょう。彼に対して、どうすれば永遠のいのちを得ることができるかを一生懸命説いたでしょう。「イエスさまを信じなさい。真理を信じなければいけないですよ。」と、イエスの死や復活やその十字架の意味を私たちは一生懸命教えたかもしれませんが。でも、イエスのこの応答の中には、信仰とか、信じるということばは一切出て来ないのです。イエスは非常に冷たい応答をされたのです。それがどのように表わされるのでしょうか？二通りの応答があります。

### ◎青年に対するイエスの応答

#### 1) 青年が使ったことばに対して

初めにされたことは、この青年が使った一つの単語を取り上げることです。偉大な神学者は「ことばの定義」にこだわります。人類至上最高の神学者であるイエスは、ここでまさにそのことをされるのです。イエスはこの青年が使った一つの単語を取って、彼に非常に冷たい応答、いや、非常に厳しい要求をされるのです。ここでイエスが取り上げたことばは「**良い**」ということばです。マルコとルカの福音書では「**良い先生**」とそこでこのことばを使っています。マタイの福音書では「**良いことについて**」尋ねているところに「**良い**」ということばを使っています。先ほども言ったように、このことばは、通常、教師に対して「**良い先生**」というように使われることばではありませんでした。このことばはここでイエスが説明するように、神のことを現わして使うことばです。イエスは言います。マタイ19：17「**なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。**」と。良い方はひとりだけです。神です。「完全にあらゆる部分において圧倒的なまでの良さをもっているのはひとりしかいません。」と言うのです。だから、もし、あなたがわたしに対して「**良い先生**」と呼びかけ、「何が良いことなのかを教えてください」と問いかけるなら、あなたはわたしが神と同等のものであるということをしつかりと認識していることになる。そういうことですか？」と問い返しておられるのです。

完全な良さをもっているのは神だけだと。もし、この青年がイエスに対して「**良い先生、良いことを教**

えてください。」と言うなら、イエスは問い返されます。「あなたは準備ができていますか？わたしが確かに神と深い密接な関係をもったものであり、神からのメッセージをわたしが人々に伝えていることを認める、その準備をあなたは出来ているのですか？」と。よく考えてください。イエスはこの青年の「どうすれば永遠のいのちを得ることができるのですか？」という、すばらしい質問に対する答えをするのではなくて、どうでもいいようなことにこだわっていると思われませんか？この青年がした質問で、彼が語ったことばの中で、最も気になくてもいいと思われるようなことばに、イエスは目を向けたのです。「あなたは本当に分かっているのですか？」と聞かれたのです。人目をはばからずに、熱心に、大胆に、へりくだってすばらしい正しい質問をしたこの青年に対して、イエスは「**良い**」ということばにこだわったのです。なぜなら、このことばは非常に重要な意味をもっているからです。後でそのことが分かります。でも、イエスはこの「**良い**」ということばにこだわって「唯一良い方は神だけであり、神だけが何が良いのかを決めることが出来るお方だ。」と言われたのです。だから、「もし、あなたがわたしを良い者と呼び、わたしに良いことは何かと尋ねるなら、それはあなたがわたしのことを神と認めているかどうかと問われるのだ。」と。もし、本当に彼がこのことを正しく理解してイエスを「良い先生」と呼んでいたとするなら、その責任は明らかです。彼が本当にイエスが良い先生で、このイエスが神のメッセージを受け継いでいる、むしろ、神と同等の方であることを彼が本当に理解していたとするなら、イエスが言われたことに対して、彼が応答すべき仕方はどのようなものだと思いますか？イエスの言われる通りにするべきではないでしょうか。イエスは言われます。「あなたは、その準備ができていますか？」と。

この時には、もうすでに多くのユダヤ人たちは知っていました。イエスがご自分のことを神の子だと言っていたことを。特に、人々のリーダーたちはよく知っていました。イエスが神のことを「わたしの父」と呼んで、自分が神と同等なものであることを、人々の前で公に話していたことを。もうこの時には、人々はよく分かっていました。このイエスがラザロを死からよみがえらせるほどの大きな働き、奇蹟を行なうことが出来る偉大な力をもっている方だということ。この青年はイエスが神であることを知るべきでした。でも、彼はそのことに気づいていなかったのです。そのことをしっかりと理解した上で「良い先生」と言ったのではなかったのです。イエスは言われます。「良い方は、ひとりだけです。あなたはわたしをそのものだと思いますか？」と。

## 2) 分かっていること、分かりきっていることを言われた

もう一つ、イエスの冷たい応答があります。それは余りにも明らかなことを彼に告げることです。皆さん、私たちも当然知っていることを言われるとむっとしませんか？バカにしているのかと思います。イエスが言われたことはまさにそれでした。青年は尋ねました。16節「**永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。**」と。イエスは答えます。17節「**良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはிரりたいと思うなら、戒めを守りなさい。**」と。皆さん、この青年の驚いた顔、苛立った顔を想像出来ますか？なぜなら、青年はその「**戒め**」を幼い頃からずっと聞き続けて来たからです。そのようなことはだれから言われなくてもよく分かっていたのです。そのことを守り続けていながら、私はまだ「永遠のいのち」をもっていないと虚無感に包まれていたのです。だから、イエスのもとにやって来たのでしょう。それなのに、イエスが言われることは「あなたは戒めを守りなさい。」でした。彼はそのことばを聞いて問い返しました。18節「**どの戒めですか。**」と。もしかすると？と彼は思ったのかもしれませんが。確かに、今まで考えられる限りすべての戒めを守って来たけれど、もしかすると、見逃していたことがあるのかもしれない、イエスはそのことを言うってくれるのかもしれないと、そのような期待感をここで抱いたのかもしれませんが。「どの戒めなのだろう？全部守って来たつもりだが、永遠のいのちを得るために必要なものがあつたのかもしれない、どれだろう？どの戒めですか？」と。その姿を想像出来ますか？イエスの答えは基本中の基本です。十戒の後半部分、後半の六つのうちの五つです。そして、マタイの福音書の中ではそれらをまとめるように「**あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。**」(19節)ということばが加えられています。彼はこれらのことを知らなかったと思いますか？これらのことを守らなかったことが一度でもあつたのでしょうか？彼の答えは明らかです。「**そのようなことはみな、守っております。**」。「どの戒めですか？永遠のいのちにはいる方法を教えてください。」という正直で熱意をもった大胆な質問に対して、イエスの答えは何と冷たいものでしょう。もう知っているでしょう、今更、わたしが言わなくても分かっているでしょうと…。事実、マルコとルカの福音書には、イエスはこのように言われていることが記されてあります。「**戒めはあなたもよく知っているはずです。**」(マルコ10:19、ルカ18:20)と。何と冷たいことばでしょう？

もちろん、イエスがここで言わんとしていることは、律法を守るなら救われるということではありません。そのことをこの後、文脈の中でイエスははっきりと言われるのですが、けれども、イエスはこれらの律法を上げることによって、彼に気付かせようとしたことがあるのです。それは、彼が律法を完全に守っていないということです。律法は、事実、人々が義と認められるために与えられたのではなく、

人々をのろいに定めるため、人々をさばきに入れるために与えられたものであることを、イエスは教えようとしていたのです。このことをイエスは彼に知らせようとしたのです。なぜなら、彼はその理解を正しくもっていなかったからです。そのことは彼の答えに、彼の告白に現われています。

### 3. 青年の破滅的な告白

三番目に私たちが見るのは青年の破滅的な告白です。正直な質問があり、冷たい応答がありました。そして、彼を破滅へと導く告白が待っていたのです。彼は言いました。20節「**そのようなことはみな、守っております。**」。マルコとルカはこのように言います。「**先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。**」(マルコ10:20、ルカ18:21)と。この当時、ユダヤ人の社会において人々は律法に従うことは出来ると考えていました。そして、この青年は自分自身を見つめたときに、律法を守ることにに関して言えば、私は非の打ち所がないと考えていたのです。確かに、彼はきっとそのような人物だったのでしょう。だから、若かったのに役人になったのです。会堂の役人に任命されたのです。人々からの尊敬を受けるような地位にいたのです。彼は周りから見ると、少なくとも、表面的には律法をしっかりと守っていた人物だったのです。多くの人たちは彼のことを知っていました。律法を忠実に守るすばらしい熱心な信仰者だと。それゆえに、彼が「**そのようなことをみな、小さい時から守っております。**」と答えたことは、それほど不思議なことではなかったのでしょうか。少なくとも、彼自身がそのように思っていました。そして、周りの人たちもそのように思っていたのです。

私たちがこの群衆といっしょにいるなら、私たちが彼を見て確かに彼は律法を守っていますと思ったことでしょうか。でも、いいですか、皆さん、彼のこの告白は、この会話の中で最も重要なことばであると言うことが出来るでしょう。彼は何のためにイエスのもとに来たのでしょうか？何を聞いたかったのですか？どうすれば永遠のいのちを手に入れることができるのかということでした。それが彼の質問でした。イエスの答えは「あなたは知っているでしょう。戒めを守ったなら永遠のいのちを得ることができるでしょう。」と言われたのです。彼は何と答えましたか？「いいえ、私は戒めを守って来ました。」と言ったのです。つまり、それは何を言っているのかと言うと、律法をどれだけ守ったとしても、永遠のいのちは受けられないということを、この青年は周りにいた群衆の前で大胆に告白したのです。「私はどれ程一生懸命神の前にこれらのことを行なってもいつまで経っても空しいのです。」と言ったのです。「永遠のいのちがないのです。どうすればそれを受けられるのか分かりません。」と。何と重大な発言でしょう。彼のこの告白の中に私たちは二つの破滅的な失敗を見ることができます。

#### ◎青年の破滅的な失敗

##### 1) 自分は神の基準を満たしていると自負していたこと

一つは、彼が自分で律法、神の完全な基準に到達していると考えていたことです。別の言い方をすれば、彼は自分の心の中において自分のことを罪人だとは一切思っていなかったということです。彼は律法に書かれているありとあらゆる内容を自分で勝手に変えてしまっただけで、その解釈を勝手に行なって、私は幼い時からずっと律法を守ることが出来ていますと言うような者になっていたのです。彼は律法を軽く考え、それを軽々しく受け入れ、律法を表面的にしか見ていなかったのです。そして、この律法を使って他の人たちと自分を比べて、自分がいかに優れた者であるのかという、その安心感を抱くために用いたのです。けれども、それゆえに彼は自分の罪深さに気づくことがありませんでした。その通りです。決められたことを守っていると思うなら、悪いことは一つもないのですから。

##### 2) 律法の真の目的を理解していなかった

もう一つの破滅的な失敗は、彼が律法の真の目的を理解していなかったということです。彼は自分が罪深い者だとは思わなかったのです。それはなぜかと言うと、彼は律法によって自分は正しくなれると考えていたからです。律法が私を義と定めてくれると思っていたからです。だから、一生懸命行ない続けるなら、私は益々義人になると考えていたのです。彼にとって律法は永遠のいのちを得るための手段だったのです。守るなら与えられる、彼はそう思っていたのです。けれども、律法の本当の目的は「罪を明らかにすること」でした。パウロはローマ人への手紙でそのことを何度も明らかにしました。それゆえ、律法は絶対に人々を救いへと導くことはできないのです。それが目的ではないからです。だれ一人として律法を守ることによって義と認められることはないのです。なぜなら、だれ一人律法を完全に守ることは出来ないからです。マッカーサー先生はこのように言われました。「ユダヤ人たちは彼らを滅ぶす剣として律法を捉えたくありませんでした。彼らは自分たちを神へと誘う方法として律法を捉えていたのです。」と、まさにその通りでした。

唯一、彼が正しかったことは、自分は永遠のいのちをもっていないと知っていたことでした。でも、もっていなかった理由は、彼が命令を行なわなかったからではなくて、彼が律法が与えられた目的を正しく理解していなかったからだということに気付いていないのです。人を救うために律法は与えられていなかったのです。だれ一人として神の完全な基準に到達することは出来ないのです。私たちが律法を

見るときに分かることは、私はいかに罪深い者であるかということしかありません。けれども、彼はそれを見ることができなかつたのです。そのことを彼は見逃していたのです。ヤコブはこのように言いました。ヤコブの手紙2：10「**律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となつたのです。**」。イエスは実はこの青年に優しく接していたのです。冷たい応答だったかもしれませんが、イエスは彼に気付かせたかつたのです。「律法のすべてを完璧に守つたことありますか？もし一点でもつまずくなら、律法全体を犯したことになるのですよ」と。イエスが「永遠のいのちを欲しいと思うなら、もし、いのちに入りたと思うなら戒めを守りなさい」とそう言われたときに、この青年は気付くべきかつたのです。自分自身がいかに、その詳細に至るまで、律法を正しく全うして来たのかどうかと。けれども、彼はそのようにしなかつたゆえに、「私は守つて来ました」と破滅的な告白をしたのです。

#### 4. 結果

イエスはまるで追い打ちをかけるかのように厳しい要求をされました。この青年の苦しみが見えませんか？彼はどうすればよいのか分からないのです。人目を恐れずに、せっかく聞けると思つてやつて来たのに、その答えを求めて来たのに、イエスは自分の知っていることしか言わないのです。答えが見つからないと困惑したそのような中で、彼はイエスにすがりつくように質問を続けます。20節「**何がまだ欠けているのでしょうか。**」と。イエスの答えは厳しい要求でした。けれども、その要求を見る前に、ぜひ、マルコの福音書10：21を見てください。「**守つております。**」と言つたその青年を見て、そして、「いったい、何が欠けているのでしょうか」と訴えたその青年をジーンと見つめて、イエスはどう思われたのでしょうか？マルコはこのように記しています。「**その人をいつくしんで言われた。**」と。皆さん、ここでは「愛する」ということばが使われているのです。イエスは彼を愛されたと書いてあるのです。よく考えてみてください。イエスは何ためにこの地上にやつて来られたのでしょうか？イエスはご自身で言われました。「**人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。**」（ルカ19：10）と。

このとき、イエスは十字架にかかつて死ぬためにエルサレムに向かつていたのです。このように永遠のいのちをもっていないことを知り、それを欲しいと願つて止まない者たちに、イエスはその永遠のいのちを備えるために来られたのではなかつたですか？それを求める人物を見てイエスは愛されたのです。でも、この愛情はほとんどあわれみから出てものなのでしょう。なぜなら、イエスは彼の心をよくご存じだつたからです。イエスは決して冷たくはなかつたのです。拒むときに「わたしはあなたが嫌いだからあなたを追い払います」と言われたのではありません。あなたを愛して止まないけれど、あなたのためにわたしは死ぬけれど、でも、あなたがわたしの言う通りに付いて来ないなら、あなたを受け入れることは出来ない」と言われたのです。

厳しい要求をされました。イエスは言われます。21節「**もし、あなたが完全になりたいなら、帰つて、あなたの持ち物を売り払つて貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。**」、これがイエスがこの青年に求められていることでした。一つの要求がなされています。それは「**わたしについて来なさい。**」です。これが一つの要求です。この要求は、実は二つの側面を持っています。まるで一枚のコインの表面と裏面のようです。二つがセットになっているのです。イエスがこの青年に求めたことは、

a) 自分自身を否定すること：「**あなたの持ち物を売り払つて貧しい人たちに与えなさい**」と言われました。もし今私たちが、イエスのもとにやつて来て「私、救われたいのです」と尋ねる人にこの答えをするなら、私たちはきっと異端だと言われるでしょう。でも、イエスはこのように答えられたのです。なぜでしょう？よく考えると、イエスはここで何か特別なことを言つてはおられません。実は、このことはイエスの働きの中でずっと言い続けて来られたことです。この要求をすることによって、イエスは彼が単に隣人への愛に欠落していたということを示そうとしているだけでなく、彼が自分の生涯の中で大切だと思つているものすべてと決別しなければならぬということを示そうとされたのです。この当時の財産は個人で所有しているものではなく、親から子へと代々受け継がれて行く家のものです。アブラハムの財産はイサクのものになり、イサクの財産はヤコブのものになり、それは次々に子へと受け継がれて行つた通りです。この青年が若くして豊かな財をもつていたのは、彼が何か発明をして特別な富を得てというのではなく、忠実な息子として代々伝わつて来た財を守つて来たのです。彼はその財産を家族の長として管理していたのです。それらを全部売り払うということは、単に財を失うことだけでなく、家族や周りで彼を尊敬していた人たちはどのように思うでしょう？イエスが要求されたことは「あなたが大切にしてくる財をすべて、財産だけでなく人間関係やありとあらゆる事柄を横に置くことが出来ますか？」ということでした。持ち物を全部売り払つたなら家族は彼のことを憎みませんか？「あなた一人の決断でそんなことをして…」と言うでしょう。周りの人たちは「あーあ、あの人はどこかおかしくなつてしまった」と言うでしょう。イエスが求めたのは「**すべてを捨ててわたしに従つて来なさい。**」ということでした。ルカ14：26-27でイエスはこのように言われました。「**わたしのもとに来て、自分の父、**



母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。：27  
自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」、さらに、続けて  
33節では「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になるこ  
とはできません。」とされています。「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の  
得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」(マタイ16：  
26)。イエスが要求されたことは特別なことではありませんでした。イエスはこれをするならあなたは  
救われるということを行ったわけではありません。「あなたはわたしのためにすべてを捨てることができます  
か?」と言われたのです。そして、もう一つ、コインのもう一方の側ですが、

**b) 服従：**自分を捨てること、そして、従うことを求めたのです。簡単に言うなら、服従するためには  
私たちはすべてを捨てなければならないということです。イエスの言われることをすべて聞き従おうと  
思うなら、他のことに耳を傾けてそれを行なっていたらできません。だから、他のことはとりあえず  
全部横に置いて、イエスの方だけを向いて、イエスの言われることだけを聞いて行なう行かなければ  
いけないのです。それをするために、最初にしなければいけないことは、私たちがすべてを捨てること  
です。人は二人の主人に仕えることはできないのです。この命令は、取税所に座っていたマタイに対し  
てイエスが語った命令と同じ命令でした。「わたしについて来なさい。」。また、この命令は、ガリラヤに向  
かう途上でピリポに会ったイエスが「わたしに従って来なさい。」と問いかけたその命令と同じものでした。  
そして、この命令は、ガリラヤ湖畔で漁をしていた四人の最初の弟子たちに対して「わたしについて来な  
さい。」と言ったそのことばと何も変わらないことばでした。彼らはみな、すべてを捨ててイエスについて  
行きました。問題はそこにあったのです。

確かにこの青年に対して語られたことばは、重さが違ったかもしれませんが。なぜなら、彼は大きな財  
産を持っていたからです。でも問題はいつも一つなのです。「すべてを捨ててキリストに従うことが出来  
るか、出来ないか。」です。イエスがこの青年に最初に答えた時に何を問題にされましたか? 「良い」と  
いうことばでした。なぜ、このことばにこだわったのがここで明らかになります。もし、この青年が  
本当にイエスが「良い先生」だと思い、その良い先生であるイエス・キリストが神との深いつながりをも  
って、神からのメッセージを託されて、いや、神ご自身として彼に語っておられると信じるなら、彼  
がすべき唯一の応答は「はい、分かりました。私はすべてを捨ててあなたに従います。」ということ  
です。皆さん、神の前に立って「いえ、神さま、あなたの言われることには一理あるけれど、私は申し訳  
ないけれど、それだけはしたくありません。」と言いますか?問題はそこにあったのです。

私たちは最後の悲しい現実を見ます。ルカはこう言います。「すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。」  
(18：23)と。ここで使われていることばは聖書の中では珍しいことばですが、実は、マタイが  
ゲッセマネの園で祈っているときのイエスの姿を現わして、これと同じ単語を使っています。どのよう  
な悲しみか想像出来ますか?それがこの青年の悲しみ、嘆きだったのです。なぜなら、彼はきつと心の  
中で計ったのでしょう。「確かに、私は永遠のいのちをもっていないから永遠のいのちが欲しい!でも、  
それを得るためには私はあらゆるものを捨ててイエスさまに従わなければいけない。どうすればいいの  
だろう。」と。彼の悲しみは大きなものでした。なぜでしょう?彼は自分が一番欲しいと思っていたもの  
を得ることが出来ないと思ったからです。なぜ彼はそう思ったのでしょう?なぜ、「悲しんで去って行っ  
た。」のでしょう?彼は永遠のいのちよりも自分の財産を選んだのです。自分の現在の生涯を選びました。  
永遠のいのちを得るためには、私が今持っているあらゆるものを捨ててイエスに従って行かなければい  
けないとするなら、私はそこまで欲しくない、それを選択出来ない、今の生活は大切だからと、その心  
の中の葛藤が彼の表情に表われたのです。マルコは言いました。「すると彼は、このことばに顔を曇らせ、」  
と、悲しみで彼の顔はゆがんだのでしょう。

皆さん、考えてみてください。彼は財産を持っていました。だから、彼はそれを売ることができました。  
彼の周りには貧しい人たちがたくさんいたから、売った収益をその人たちに施すことが出来ました。  
彼は実際にイエスが歩いて行く後ろを歩いて行くことが出来ました。実際に、彼は走ってイエスのもと  
にやって来たではないですか!どれも彼には出来ることだったのです。なぜ、彼はしなかったのでしょ  
う?彼はイエスの要求に応じることを拒んだのです。それは、彼が出来なかったからではなくて応じな  
かったからです。応じたくなかったからです。天で宝が与えられる約束が与えられています。しっかりと  
報いはあったのです。彼がすべてを捨ててイエスに従って行くなら、神は確かにその報いを用意して  
くださっていたのです。けれども、彼は天に宝を積むことよりも、この地上に宝を持っていることの方  
が大切だとしたのです。なぜなら、彼の心は最初から天になかったからです。マタイの福音書6章でイ  
エスがそのように教えている通りです。

皆さんどうですか?皆さんはイエスのこの要求にどう答えられますか?今ごいっしょに見て来ました。  
この青年のように「私もそれは出来ません。」と言いますか?それとも「分かりました。すべてを捨てて

あなたに従います。」と言いますか？パウロはこの青年に非常に似ていました。ピリピ3章でそのように言っています。4節「ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。」、6節「その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」、しかし、イエス・キリストに会って彼は変わったのです。このように言います。7-8節「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。：8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。それは、私には、キリストを得、また、」、キリストを知ること、キリストに従うことの方がはるかにすばらしいこと、それがクリスチャンの姿だと言ったのです。マタイ11：30「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

皆さん、イエスは求めてやって来る者たちすべてに、救いを与えるわけではありません。従って行くとする者に救いを与えられるのです。マッカーサー先生はこのようなことを言いました。「私たちの主は、人にものを与えたり、罪について悪かったと思ったりすることによって救いを得ることが出来ると言っているのではありません。主は、救いが自分の罪と自分の無力さに向き合い、完全に自分を捨ててイエス・キリストに服従しようとやって来る者のためにのみあるのだと言っているのです。これは全く新しい教えではありません。」と。心を尽くし、思いを尽くし、自分のありとあらゆるものを尽くして神を愛する者は、神が備えてくださるのです。すべてを捨てて…。

願わくは、そのような信仰者になりたい、皆さんにもそうであって欲しいと心から願います。